

外島での二年六ヶ月の間で一番大きなできごとは、昭和九年九月二十一日の風水害であることはいうまでもありません。

風水害の前日、九月二十日の夕方、なんだかよくわからないんですが「蚊」の大きさぐらいの虫が空いっぱい飛んでいたんです。なんだろうと思いつながらも別に気にはとめなんだけれど、後であれば室戸台風の前兆やったんかなと思えました。

二十一日の朝、いつものように朝食をすませると、暫くして青年団の人が来て台風が近づいてくるからと警備してくれていましたが、八時半頃から風雨が急に強くなり、元気な者がそれぞれ療舎のガラス戸に畳を立てかけたりして守っていましたが、風はどんどんひどくなり避難するように指示がありました。しかし、もうどうすることも出来ない状況でした。院内はたちまち混乱状態になり、皆土手の方へと逃げたんです。

私は俳句仲間のKさんという四十歳ぐらいの人と一緒に「布屋」という村の方へ土手ぞいに走ろうと、土手の方へ向かったんです。

保養院は低い場所でしたので、療舎の屋根の高さよりも土手の高さの方が一寸高いぐらいでした。ですから、皆土手の高い所に上がって「布屋」の方へ逃げようと思ったんです。

そこへ、あっという間に一丈もゆうにあるような大きな波が押し寄せてきました。療舎と土手の間には逃走防止の為の堀がありました。早く土手に行こうと、その堀を泳いで渡ろうと思ったとたんに大きな波に呑みこまれて畑の方に流されてしまったんです。幸い私は子供の頃から泳ぎの心得があったんで、水のなかに巻き込まれんように必死で立ち泳ぎをしていたら、そこに小舟の流れているのを見つけました。そして、なんとか小舟に手をかけることができました。気がついたら舟べりにつかまる人が二人三人と増えました。「手を離したらあかんで」とそれぞれ声をかけ合いながら居りましたら、急に舟が動かんようになったんで足をのばしたら足がついたんです。気がついたら水かさが減りはじめていて、小舟は土手に突きあたるようになっていました。皆、顔を見合わせて「助かった」と喜びました。その時、その小船に九人もつかまっていたことを初めて知りました。

土手を歩いて保養院へ帰ろうとポツポツ歩いていたら、職員の人がかけて来て「布屋」の空地の方へ誘導してくれました。そこで皆の来るのを待つように云われました。保養院までの土手はあちこち壊れているようでした。後から分かったのですが、私たち九人が助かった小舟は、地元の農家の人が人糞を運搬する「こやし舟」だったんです。